

桑弘羊「政治経済論」管窺

稲 葉 一 郎

目 次

はじめに

一、予備的考察

二、政治経済論

(一) 国防 (二) 司法

(三) 救災

(四) 経済の調整

(五) 交易

(六) 財政

三、餘 論

は じ め に

昭帝の始元六（西紀前八一）年、漢の政府は先の皇帝、武帝の時代に実施された塩鉄専売、均輸・平準等の財政政策に対する民間の批判の高まりを承け、民間の実情を尋ねるといふ名目でいわゆる塩鉄会議を開いた。

武帝その人は、自己の名において実施した政策に対して、いかなる人にも批判することを許さなかったが、この時、民間の批判に耳を貸し、民間代表者と政府当局者の会議を開くに至った背景には、財政策の実際の立案者であり推進者でもあった、当時の外朝の実権者御史大夫の桑弘羊と、少い昭帝を擁して内朝を支配していた大司馬大將軍の

霍光の対立があり、民間代表者賢良・文学は霍光の意を承けて政府の政策批判を展開したものである。

会議は儒教的思想背景をもつ賢良・文学と主として法家的立場に立つ政府代表（大半は桑弘羊の応酬）との論争となり、塩鉄専売、均輸・平準のみでなく、政府の全ゆる政策が槍玉に挙げられた。その意味ではこの論議は当時の政治・経済・社会・文化全般に及ぶ批判でもあった。我々はこの論議を通して当時の社会の具体的な諸問題を垣間見ることができるのであるが、同時に『史記』や『漢書』に詳伝のない、また専著のない桑弘羊の思想を具体的に窺い知ることができるのである。当時の議事録的記録に基づいて会議の様子をまとめ上げた桓寛『塩鉄論』⁽⁴⁾はその点でも極めて重要である。桑弘羊の著述ではなく、発言記録に基づきつつ彼の「政治経済論」を再構成しよう⁽⁵⁾というのが小稿の目的であり、「管窺」と題する所以もここにある。

なお、この会議の結果、余り重要でなかった酒の専売制が廃止され、関内（京畿）での鉄の専売が停止された。そしてその翌年、桑弘羊と霍光の確執は遂に燕王劉旦の謀反事件の形で表面化し、桑弘羊は燕王に加担したという名目で捕えられ処刑された⁽⁶⁾。

註(1) 梁效氏「読『塩鉄論』——西漢中期儒法両家の一場大論戦——」（『塩鉄論』上海人民出版社、一九七四年刊）。

(2) この対話体の作品について、これが桓寛の純然たる創作であるのか、或いは議事録の忠実な再録であるのか、議論の岐れるところである。ここでは議事録的記録に基づき若干の布衍・潤色がなされたものとする一般的な見解に従うことにする。

(3) 『塩鉄論』の上述の性格からして、この書に見える桑弘羊の発言内容が彼の思想の全体をカバーするものでなく、また論敵たちの発言に触発されて吐露された彼の思想の特定の一部分であることは自明であり、従って彼の思想を再構成するに当たっても、そのような史料の限界性は確認しておかなければならない。

(4) 郭沫若「塩鉄論読本」序、西嶋定生氏「武帝の死——『塩鉄論』の政治史的背景——」（『古代史講座』11）、徐復観氏「塩鉄論中の政治社会文化問題」（『新亞学報』一一卷下）。

一 予備的考察

小稿は前稿「桑弘羊の財政策」^(a)において、行論の都合上触れ得なかつた財政策の思想的根柢について構成的に考察するものである。従つて本論に立入る前に予かじめ前稿で論じたところを要約し、本論の導入とするのが便宜である。

桑弘羊は景帝五（前一五二）年、洛陽の商人の子として生れ、少時から心計（暗算）の才に卓れていたが、建元元（前一四〇）年、武帝の即位の年、十三歳でその才を見込まれて侍中（側近）として登用された。その後、彼はその地位を利用して秘府で古今の理財家の書を閲覧し財政について研究する一方、家政では節儉と貯蓄に務め、それら貯蓄や賞賜を資本として營利事業に投下し家産を築き上げる。

ところで武帝は周知の對外積極策や大規模な土木事業の推進の結果、財政危機に直面していたが、元狩三（前一二〇）年、大規模な洪水の災を受けるや、被災者の救済、財政の建て直しに向けて新しい財政策を模索する。この新財政策の企画・具体化の過程において桑弘羊が登場する。彼はこれまでの研究の成果と營利事業の経験とを新しい財政策に結実させる。

彼は塩鉄専売や均輸・平準の企画・具体化の過程で少府（帝室財政）収入の一部を大司農（国家財政）に移管することによつて二元財政、すなわち帝室財政と国家財政の規模の均衡化を図り、とくに塩鉄収入を徴税制から専売制に改めることによつて、また郡国の貢獻の制を廃し均輸・平準制を設けることによつてそれに近づけた。これらの政策は、一面では皇帝の家政（帝室財政）収入を奪ひはしたが、それによる収入の飛躍的増加は国家財政の収支の均衡

を、また帝室財政と国家財政の規模の均衡を保障するものとなった。

彼はまた、貨幣鑄造権を郡国から中央の上林三官（均輸・弁銅・鍾官）に回収して一本化し、五銖銭の信用を高める一方、元封元（前一〇）年以来、略ぼ五年毎に武帝に勅めて泰山封禪の儀式を執行させ、その儀式に用いる神籬の原料（菁茅）を独占することによって（帝室）財政収入の補填を試みた。

このようにいわば聖域ともいべき皇帝の家政（帝室財政）収入に手をつけたり、皇帝の儀式に名をかりて財政収入の補充を企てることは恐らく武帝の親密な側近桑弘羊にして始めて可能であったであろう⁹⁾。

これらの財政策はこれまでの彼の理論研究と実践的な経験に裏打ちされたものであったが、とくに理論研究の成果が威力を発揮したものである。

ところで桑弘羊が研究した思想とはどのようなものだったのだろうか。前稿では彼に影響を与えた思想家として太公、管子（仲）、商鞅、司馬遷等を挙げたが、彼はこの外にも多くの先人や同時代人からも影響を受けたことはいうまでもない。

今、仮にどのような思想家から影響を受けたかを明らかにするために、『塩鉄論』の桑弘羊の論述に引用・言及された文献を列挙すると、大略次のような結果になる¹⁰⁾。なお、（ ）内は引用された度数を表わす。

儒教関係—『易』(五)、『書』(五)、『詩』(九)、『禮記』(二二)、『春秋』(一七)、『論語』(二〇)、『孟子』(六)、『孝經』(一)。

諸子関係—『管子』(七)、『太公』(一)、『商君書』(一二)、『老子』(一)、『莊子』(二)、『墨子』(一)、『荀子』(四)、『韓非子』(三)、『師曠』(一)、『鄒衍』(一)、『呂氏春秋』(一)、『淮南子』(六)、『史記(司馬子)』(一四)。

この外にも董仲舒『春秋繁露』(一)と思われるものが二、三箇条見える。

見られる通り、桑弘羊は『論語』を筆頭に儒教のテキストには一通り言及しているし、諸子に関しても『管子』を

はじめとして多くの思想家の書物に言及しており、これらの書物に通曉していたものと思われる。また『史記(司馬子)』は彼の愛読書であり、歴史的知識の源泉の一つでもあったようである。

上の諸書名と引用・言及の度数を見ると儒教関係のものが極めて多い。これは彼が儒教の尊崇者であったことを意味するのだろうか。恐らくそうではないであろう。儒教のテキストに頻繁に触れるのは儒教官学化の時代の一般的風潮に従ったものにすぎず、五経の中で『春秋』への言及が多いのも、『春秋』学が当時の儒学の主流の学問であったこと、論敵の賢良・文学が盛んに引用したことと深い関係がある。従って彼の思想の特異性は『春秋』への言及の回数から引き出すことはできない。また『論語』や孔子への言及も賢良・文学の主張を反駁する意図の下に批判的に行われていることが多いから、これもやはり頻度数で影響の深淺を論ずるわけにはいかない。儒教經典の引用が多いということはそれだけ理解が深いということではあるにしても、そのことが影響の大きさを物語るものでは必ずしもない。結局、発言内容において積極的意味をもって引用されている文献(思想)によって彼の思想の源泉を探る以外に道はないであろう。されば彼の主張の典拠として大きな意味づけをされ引用されている『管子』が何といつても最も影響力のあった思想として評価されることになる⁽⁹⁾。『太公』は管仲(管子)の先達として積極的な評価を受けているし、商鞅は法制の施行に関して高い評価を受けている。また、議論の過程で批判は加えたが、五経や『論語』、『孟子』、すなわち儒教典籍からも少なからぬ影響を受け、それが政治經濟論の基礎的な理念を形成していることは注意すべきであろう。この点については後文で触れることになる。

桑弘羊はこれら多くの思想や文献を、或る意味では積極的に、或る意味では批判的に、或る意味では便宜的に受け容れ、独自の思想体系を形成しているのである。しかしそれらの多くの思想の中でも、『管子』の影響が最も大きく、とくに經濟政策理論においては決定的であったことは否定できない。

なお、注意すべきは、『塩鉄論』での桑弘羊の主張は、塩鉄専売制や均輸・平準制などの諸財政政策を定着させた後

の、いわば実績を踏えた完結した姿であり、政策の立案、或いは着手当初の、恐らくより貧弱で流動的な見解とは区別すべきではないか、という問題である。若年の実践的経験が彼の財政理論の基礎にあることを想えば、政策の基礎にある基本的な立場には恐らく大きな変化はなかったにしても、政策実施当初には晩年の思想体系はまだ確立しておらず、具体的な構成要素は個々の政策の実施過程で補充され固められていったと考えられるからである。こゝでは一応、基本的な立場の一貫性を前提として、『塩鉄論』によりつつ桑弘羊の財政政策の基礎にあった哲学を考察することにした。

註(5) 『立命館文学』四一八～四二二合併号『三田村博士古稀記念 東洋史論叢』

(6) この点については前稿でも触れたが、『漢書』食貨志下の塩鉄専売制実施に関する条下の「桑弘羊、貴幸せられ…」なる叙述や『塩鉄論』伐功第四五における文学の

…上(武帝)以爲然。用君(桑弘羊)之議、聽君之計、雖越王之任(大夫)種・(范)蠡不過。という言葉からもそのことが察せられる。越王勾踐と大夫種・范蠡以上の親密な関係に擬しているところに武帝の寵異の程が窺えよう。

(7) この統計は郭沫若『塩鉄論讀本』および王利器氏『塩鉄論校注』の注記に本づいて作成したものである。なお同一発言において異った篇から引用された場合には、同一文献でも複数の扱いをした。また、典拠が重複している場合、例えば『墨子』・『史記』仲尼弟子列伝についてはより古い典拠という理由から『墨子』をとったが、或いは『史記』によっていることも考えられる。他の可能性も考えられる場合は(?)を附した。

(8) 内田銀藏『塩鉄論に就きて』(『日本経済史の研究』)、高木友之助氏『塩鉄論』にあらわれた桑弘羊の経済思想について「『中央大学文学部紀要』一二三号、町田三郎氏「塩鉄論について—その一—」(『集刊東洋学』一三三号)。

二 政治經濟論

さて、桑弘羊の政治經濟論を論ずるに先立つて、彼が政治・經濟の展開の舞台である中国、すなわち漢帝国治下の中国についてどのような見解をもっていたか、どのような位置づけをしていたか、を瞥見しておくことにしよう。

桑弘羊は先ず世界の規模について鄒衍を引きつゝ次のように述べる。

鄒子は、晩世の儒・墨の、天地の弘、昭曠の道を知らず、一曲を將て九折を道^いわんと欲し、一隅を守りて萬方を知らんと欲するの、猶お準平なくして高下を知らんと欲し、規矩なくして方圓を知らんと欲するがごときを疾^{にく}む。こゝにおいて大聖終始の運を推して以て王公を諭さんとし、先ず中國の名山通谷を列ねて以て海外に至る。所謂中國は天下八十一分の一にして、名づけて赤縣神州と曰い、分ちて九州となす。絶陸通ぜざるを乃ち一州となす。大瀛海ありてその外を圍^{めぐ}る。此れ所謂る八極にして天下の際なり。『禹貢』も亦、山川・高下・原隰を著わせども、大道の遙かなるを知らず。

(論鄒第五三)

と。こゝで中国は世界の八十一分の一の国に過ぎないという鄒衍の主張を引き合いに出しつつ賢良・文学を揶揄していることからしても、彼は理論的にも中国を独尊と認めていないことが分る。賢良・文学の抛り所とする經典『禹貢』の世界(中国)の外に八十以上の国が存在するのである。この鄒衍の思想がどこまで眞面目に受容されていたかは疑問だが、彼が極めて広大な世界像の中に中国を位置づけていたことは間違いない。現実主義者の桑弘羊には理論的な世界像ではなく、もっと客観的具体的な世界像があったはずであり、恐らく西は大宛、康居、安息、パミール以南の身毒、東は朝鮮、穢貉、倭国、南は交趾、日南、更にはインド南部の黄支国などに関する認識をもっていたであろう⁽⁴⁾。そして中国の四周の諸民族に対しても、このような広い視野からの位置づけがなされていたことは疑いな

い。この世界的な視野の下に彼は中国を次のように規定する。

夫れ中國⁽⁹⁾は天下の腹心にして、賢士の總ぶるところ、禮の集まるところ、財用の殖^{つちか}うところなり。

(論功第五二)

と。この広大な世界において中国はやはり天下の中心であるとともに、人材、物産の豊かな、文化の集積されたところとされるのである。いわゆる珍怪、異物などは海外・塞外に供給を仰がなければならないにしても、とにかく人材、物産、高度な文化、いずれをも備えた世界の中心なのである。

この天下、世界の中心であるところの中国、漢帝国治下の中国を如何にして治めていくか、これが桑弘羊の政治經濟論の課題であつたであらう。

註(9)

桑弘羊は武帝の側近にいたことからして、張騫らの報告を伝聞した可能性は十分あり、また愛読書『史記(司馬子)』張騫伝・大宛伝などによって西アジアやインドに関する知識を確かめたりもしたであらう。

- (10) ここでの「中国」という言葉は、厳密に訳せば、辺境に對する内地の意味であるが、基本的には辺境は内地からの人材、物資、文化の補給によって維持されているとする桑弘羊の見解からすれば、とくに内地と限定して用いる必要はないであらう。

(一) 国防

洋の東西、世の今古を問わず、君主の、或いは國家の固有の任務は、何よりもその社会、或いはその支配下の人民を他の社会の暴力や侵略から保護することであるとされる。この原則は桑弘羊の、或いは彼の代辯する漢政府の主張にも見られる。この点に関して彼は君主、或いは政府の立場から次のように論ずる。

天子は天下の父母なれば、四方の衆、その義として臣妾たるを願わざるなし。然れども猶お城郭を脩め關梁を設

け、武士を屬はひまし宮室を備衛するは、難を遠折し萬方に備うる所以なり。

(備胡第三八)

君子は篤あつき仁もて以て行う。然れども必ず城を築きて以て自ら守り、械を設けて以て自ら備うるは不仁者の己を害するが爲なり。

(和親第四八)

と。天子、すなわち皇帝は天下の人民の父母であり、常に仁愛の情をこれら人民に加え、四方の衆もそれを徳とし義として服従しないものはない。しかしながら中には例外も存在する。徳を徳とせず、仁愛の情にも背を向ける外敵や悪人の存在を否定することはできない。このような不仁者が存在する以上、彼らの出現に備えて城郭を築いたり、閼梁を設けたり、武器を備えたり、兵士を訓練しなければならぬ。このような防衛装置の設置は実は君主、國家の固有の義務なのである。

古は明王、暴を討ち弱きを衛り、傾けるを定め危きを扶く。弱きを衛り危きを扶ければ則ち小國の君悦ぶ。暴を討ち傾けるを定めれば則ち無罪の人附く。今、征伐せざれば則ち暴害息まず。備えざれば則ち是れ黎民を以て敵に委ゆたぬるなり。

(備胡第三八)

と。こゝでは君主の任務は治安と秩序の維持におかれているが、具体的には内外の暴力、すなわち外敵の侵略や不正(犯罪)から良民を保護することである。

不正からの良民の保護については次節で改めて論ずることとして、外敵、すなわち国内の人民の生活を脅かす最も恐るべき外敵は、漢代の現実に即していえば、いうまでもなく北方の匈奴であった。君主の最も重要な任務はこの外敵から父子の關係にある良民を保護することである。

王者は包含并覆し、普ねく愛して私するなく、近きがために施を重ねず、遠きがために恩を遺さず、今、俱にこれ民なり、俱にこれ臣なり。安危勞佚ふと齊しからざれば、獨り調のうべからざらんや。…緣邊の民、苦寒の地に居て強胡の難を距ふせぐ。烽燧一たび動もがれば身を没するの果あり。故に邊民百戰し、中國恬臥するは邊郡の蔽扞たるを

以てなり。：是を以て聖王は四方の獨り苦しむを懷い、師を興して胡・越を推卻し、寇を遠ざけ災を安んじ、中國肥饒の餘を散じて邊境を調のえり。邊境強ければ則ち中國安らかなり。國安らかなれば則ち晏然無事なり。

(地廣第一六)

と。邊境の民も内地の民もともに天子にとっては子であり臣である以上、辺民が外敵の凌辱に委ねられるのを坐視することはできない。内地の民の平安は彼らの犠牲の上にこそ可能だからである。されば辺民の安寧のために内地の民も然るべき代償を負担しなければならない。對外遠征や邊境の防衛を維持するための軍事費の負担は内地の民の当然の義務である、というのである。

以上を要するに、君主は父子の關係にある良民を辺地・内地の別なく平等に保護し、危険と安全、労苦と安逸の均等化の原則を実現するために、内地の人民に軍事費の負担を義務づける一方、外敵から良民を保護する具体的な手だてとして城壁の修築、関梁の設置、軍士の練成を行い、不時の侵略に対する防衛措置を講ずべきものとするのである。

ところでこゝで注意しなければならないのは、桑弘羊、或いは彼の代辯する漢政府の對外政策の立場が決して防衛、或いは秩序の維持というような消極的なものにとどまっていなかったことである。桑弘羊は外敵の侵入を生命線で防衛するという消極的受動的な立場を墨守していたのでは四周の異民族の脅威から中国（邊境）の人民を解放することはできない、と考える。四夷に対して積極的に武力を加え、漢の邊境を窺わせないようにすることこそが人民を外敵から守る最も安固な策なのである。

當世の務は後世の利なり。今、四夷内侵するも攘わざれば、萬世必ずこの長患あらん。先帝（武帝）、義兵を興して暴強を誅し、東のかた朝鮮を滅ぼし、西は冉駹を定め、南のかた百越を擒え、北は強胡を挫く。……故に聖王の地を斥くや、其の利を私するにあらず。兵を用うるや徒らに奮怒するにあらず、難を匡し害を避け以て黎民のた

めに遠く慮はかる所以なり。

(結和第四三)

と。對外積極策は武帝の一時の氣紛れから採られたものではなく、後世の利益を慮はかったものであり、しかもそれは人民の未來永劫の安寧を目的として遂行されたのである、という。そしてこのような對外政策の採択には過去の政策に対する反省があつたことはいふまでもない。

漢興りて以來、好を修め和親を結び單于に聘遣するところのものは甚だ厚し。然るに重質厚賂を紀すの故に節を改めずして暴害滋ます甚だし。先帝、その武を以て折くべく、德を以て懷くべからざるを覩、故に將帥を廣め奮撃を招き以てその罪を誅す。

(結和第四三)

と。漢初以來の人質(公主)や貢物を以てする和親政策も匈奴側の度重なる裏切りで漢は常に苦汗を飲まされた。かくて武力によつて屈伏させる以外に方法のないことが改めて確認され、遂に遠征軍の派遣となつたものである。しかし十數回に及ぶ大規模な遠征軍の派遣でも匈奴が屈伏しなかつたことから、積極策は西域遠征にまで發展する。

桑弘羊は匈奴を徹底的に制圧するには西域に漢の軍事基地を設け、西域諸國の協調の下に匈奴を討つ必要あることを提案し、武帝に採択される。

(文學曰く)：前に君(桑弘羊)、先帝のために匈奴の策を畫し、「兵もて西域に據り、これが便勢の地を奪い以て其の變を候ち、漢の強を以て匈奴の衆を攻めれば、強弩を以て癰疽を潰すがごとし。越の呉を禽うこと、豈に道う足らん哉」といえば、上(武帝)以て然りとなす。君の議を用い、君の計を聽くこと、越王の(大夫)種・(范)蠡に任ずと雖ども過ぎず。

(伐功第四五)

と。この文學の言葉には、批判的ながら、武帝の桑弘羊に対する信頼の大きさが窺われる。武帝は桑弘羊の計に従つて李広利を將とし大宛に遠征軍を派遣する。そして結果的には大宛國を服屬させ、形式的には西域の連繫の下に匈奴を討つことになるが、やはり完全には匈奴を制圧するに至らなかつたことは周知の通りである。

このように見てくると、桑弘羊の対外政策は強硬論、それも拡大主義であつたと認められるが、注意すべきはこの強硬論も決して侵略主義の立場から主張されているのではないことである。

湯・武の伐つや好んで兵を用うるにあらず、周の宣王の國を辟くこと千里なるも貪り侵すにあらず。寇賊を除き百姓を安んずる所以なり。故に無功の師は君子行らず、無用の地は聖王食らず。

(地廣第一六)

と。武帝の軍事行動も、これら聖王たちの用兵と同様、好んで興されたものではなく、侵略を自己目的とするものでもない。あくまでも寇賊を排除し百姓の安寧を保障するための深謀遠慮であり、匈奴という尋常ならざる外敵に対応すべく已むを得ずして用いられたものであつた、というのである。

要するに桑弘羊の国防論は、武帝のブレンとして、或いは武帝の代辯者としての立場から説かれ、当時官学化した儒教の家父長的国家理念に基づきつ、外敵の侵入を、或いはその可能性を排除し、全ての良民の生活の安定をはかるものであつて、この見地から辺境の防衛が、そして積極的拡大策たる對外遠征が主張されているのである。

註(1) 過去の政策に対する反省に関する史料としては次のようなものもある。

(大夫曰) 往者匈奴據河山之險、擅田牧之利、民富兵強、行人爲寇、則匈奴注之內驚動、而上郡以南威城。文帝時虜入蕭關、烽火通甘泉、群臣懼、不知所出、乃請屯京師以備胡。胡西役大宛、康居之屬、南與群羌通。先帝推攘、斥奪廣饒之地、建張掖以西、隔絕羌胡、瓜分其援。是以西域之國皆拒、匈奴斷其右臂、曳劍而走。故募人田畜以廣用。長城以南、濱塞之郡、馬牛放縱、蓄積布野。

(西域第四六)

(12) 『漢書』卷六、武帝紀、太初四年の条、同卷九六下、西域伝下、渠犂の条、および卷九四上、匈奴伝上。

なお、伊瀬仙太郎氏「漢代の西域經營」(『中国西域經營史研究』) 参照。

(13) このような積極的な国防論に対して文学らが納得しなかったのはいうまでもない。文学は批判して次のようにいう。外敵の侵入を防ぐ、或いは禍根を絶つとて、政府が辺境の防衛に満足せず、境域を拡大し、剩つさえ遠隔地にまで兵を送り込むという拡大主義に陥った結果として、人民は兵士として駆り出されるだけでなく、兵糧輸送にも動員され、その負担は愈々苛

酷なものとなり、その程度はあの暴虐な秦をも凌ぐものとなっている。老弱に及ぶ人民の塗炭の苦しみを思うべきである。抑も王者は徳で外夷を懐けるのが本来であるのに、武力で圧倒するなど筋違いも甚だしい※¹と。

この文学の批判は当時の人民の声の代辯でもあった※²が、しかし餘りにも理想論・觀念論に流れすぎていたことは見られる通りである。そしてそれは桑弘羊ら政府当局者には迂闊な議論としか受取られなかった。現実の強大な外敵の脅威から人民を守らなければならない政府（君主）の使命はこの觀念論では到底達成され得なかったからである。

(イ) 秦之用兵、可謂極矣。蒙恬斥境、可謂遠矣。今踰蒙恬之塞、立郡縣寇虜之地、地彌遠而民滋勞。朔方以西、長安以北、新郡之功、外城之費、不可勝計。非徒是也。司馬・唐蒙鑿西南夷之塗、巴蜀弊於叩筭。橫海征南夷、樓船戍東越、荆楚罷於甌駱。左將伐朝鮮開臨屯、燕齊困於穢貉。

（地廣第一六）

古者貴以德而賤用兵。孔子曰、「遠人不服、則修文德以來之。既來之則安之。」今廢道德而任兵革、興師而伐之、屯戍而備之、暴兵露師以支久長、轉輸糧食無已、使邊境之士飢寒於外、百姓勞苦於內。

（本議第一）

(ロ) 徐復觀氏「塩鉄論中的政治社会文化問題」（前掲）。

(二) 司 法

前章でも触れたように、君主、国家の重要な任務の一つに外部からの暴力・侵害から人民を保護することともに、国内の不正（犯罪）から良民を保護することがある。

一体、犯罪は人間の社会、私有財産の発生とともに生れた、とされるが、犯罪について桑弘羊はどのように考え、またその対策を如何に思考していたであろうか。

先ず桑弘羊の人性論から見よう。彼は人性、人の性質をどのように把握していたのであろうか。この点に関しては次の二つの史料が参考になろう。

性に剛・柔あり、形に好・惡あり。聖人能く因るも改む能わず。孔子は外、二三子の服を變えるも、その心を革む能わず。

（殊路第二二）

賢・不肖に質ありて貪・鄙に性あり。君子は内、己を潔くするも、彼を純教する能わず。……夫れ内、父兄の教に従わず、外、刑法の罪をも畏れざれば、周公・子産も化す能わざること必せり。今、一一則ち之を有司に責む。有司豈に能くその手足を縛り之をして非をなすことなからしめんや。

(疾貪第三三)

と。彼によれば人間の性格は生得的に決定されているのである。賢・不肖、剛・柔など、持って生れた性質は基本的には変えることができない。孔子すら外見はともかく、弟子たちの心を変えることはできなかった。されば父兄の教にも従わず、刑罰をも恐れない者たちを教化することは不可能である、とする。但し彼は別に

聖主は性に循つて化す。従わざるものあれば亦た將た兵を擧げて之を征す。是を以て湯(王)は葛伯を征し、文王は犬戎を誅せり。

(繇役第四九)

ともいつているから、犯罪についても多少柔軟性のある見方をしていことが分る。しかしいづれにしても人の性質がこのように基本的には教化し変更することができないとすれば、一部の教化し難い姦惡な者を排除(処刑)し、善良なる万民をその害惡から保護してやらねばならない。

古の君子は善を善とし惡を惡とす。人君は惡民を畜ちくわず。農夫も無用の苗たぐわを畜ちくえず。無用の苗は苗の害なればなり。無用の民は民の賊なればなり。一害を蠲のぞきて衆苗成る。一惡を刑して萬民悦ぶ。周公・孔子と雖も刑を釋はなきて惠を用うる能わず。家の惡子あるや器皿やうびも居やすんぜず。況んや惡民をや。民は愛に敖りて刑に聽く。故に刑は民を正す所以、鉏は苗を別つ所以なり。

(後刑第三四)

と。刑罰は良民を惡人から護る不可欠の手段として要請されるのである。しかしながら刑罰は良民の生活の安全を保障する手段にとどまるものではない。一方において良民が出来心から惡事・不正に走るのを予防する機能を刑罰にもたせなければならない。刑罰の軽く不確實なことが出来心を起させるのであるから、それを重く確實にして輕拳の根を絶つようにすれば良民が不正に走るのを防ぐことができるであろう。

(大夫曰く) 文學の言に「王者の法を立つるや曠きこと大路の若し」とあり、今、馳道小きからざるも、民の公に之を犯すはその罰罪の輕きを以てなり。千仞の高き、人、輕々には凌がず。千鈞の重き、人、輕々しくは舉げず。商君、灰を道に棄つるを刑して秦民治まる。故に馬を盜む者は死し、牛を盜むものに加(枷)するは本を重んじ輕疾の資を絶つ所以なり。

(刑徳第五)

と。桑弘羊は教化し難い生来的惡人による不正(犯罪)を指摘する一方で、良民による環境的犯罪の存在をも認めているのである⁴⁰⁾。これらの犯罪を社会から一掃するには令を発して人民を威赫的に教育する一方、法によつて姦惡を督責すると同時に刑罰の執行を確實なものにしなければならぬ。

令は民を教える所以なり。法は姦を督す所以なり。令、嚴にして民慚しみ、法、設けられて姦禁ず。罔、疏なれば則ち獸失し、法、疏なれば則ち罪漏る。罪漏るれば則ち民放佚して輕々しく禁を犯す。故に禁必せざれば狂夫も倖を徼む。誅滅せらるれば(盜)蹠・(莊)躄も犯さざらん。是を以て古、五刑を作り肌膚に刻むも民は矩を踰えず。

(刑徳第五)

と。ザルのような法では却つて民は法を侮り禁令をも犯すことになりかねない。禁令にも必然性・確實性を与え、民を自重させるようにしなければならない、というのである。

要するに桑弘羊は人民を二種に大別し、(数は少いが)生来的に邪惡な教化し難い惡人と善良で教化可能な良民とを設定し、良民を惡人の不正・暴力から保護するために刑罰を設ける一方、良民を惡事に走らないよう禁令を発して威赫的に指導するのであり、偏に良民の保護・管理のための法を考えていたのである⁴¹⁾。

註(14)

この点につき日原利国氏は『塩鉄論』所引「春秋」考(一)「刑罰思想について」(『森三樹三郎博士頌壽記念東洋学論集』)において、丞相・御史グループの素質原因論と賢良・文学グループの環境原因論に峻別して論を進めておられる。

(15)

一見、桑弘羊は生来的素質によつて良民・悪人を峻別するもののように考えられがちであるが、些細に検討すると、彼は人民をもっと多様に捉えているようであり、環境・情況次第で犯罪者になり得る人々の存在をも認めているようである。例えば、

博戲馳逐之徒、皆富人子弟、非不足者也。故民饒則僭侈、富則驕奢、坐而委蛇、起而爲非……。(授時第三五)
なる発言内容はそのことを窺わせる。

(16)

この司法論に対しては賢良が批判を加えているが、批判者賢良も刑罰の必要性は認めながらも、とくに刑罰の教育的側面を重視する。すなわち、刑はあくまでも人民を禮義に遵わせる一つの手段として存在するのであり、且つまたそれはいわば悪の最も極端なものを見せしめに誅するのに用うべきであつて、むやみに濫用すべきではないとする※(16)。

このように刑の教育的側面に注目するところは桑弘羊と同じであり、両者の違いは程度の差であるようにも考えられるが、決定的な相違点は賢良が当時の犯罪の実態(特異性)を把握していたことであろう。すなわち、いわゆる悪人ならざる良民が、法令で禁止された事業に手を出して処刑されるというのが当時の刑誅の実態であり、政府はこれら良民が刑罰に臨るのを寧ろ期待しているところさえある。このような刑誅の施行状況では良民と悪人が区別されどころか、民という民が政府を欺むき、愈よ治まらなくなるに違いない※(17)、とする。

この議論の背後には、政府自ら民と利を争う營利事業を興しておきながら、利を争うことを刑罰で禁止するのが抑もの誤りである、とする考えがあることは自明である※(18)。この賢良の批判は、桑弘羊の司法論が彼の財政策擁護の司法論であることを看破したものであるといえよう※(19)。

(17) ……故君子急於教、緩於刑。刑一而正百、殺一而慎萬。是以周公誅管・蔡、而子產誅鄧皙也。刑誅一施、民遵禮義矣。

(疾貪第三三)

(18) ……夫不傷民之不治、而伐己之能得茲、猶弋者親鳥獸挂罟羅而害也。今天下之被誅者、不必有管・蔡之邪、鄧皙之僞。恐苗盡而不別、民欺而不治也。

(後刑第三四)

(19) 國有沃野之饒而民不足於食者、工商盛而本業荒也。有山海之貨而民不足於財者、不務民用而淫巧衆也。…排困市井、防塞利門、而民猶爲非也。況土之爲利乎。傳曰「諸侯好利則大夫鄙、大夫鄙則士貪、士貪則庶人盜」、是開利孔爲民罪梯也。

(本議第一)

(16) 新財政政策推進のために酷吏が任用され、苛法が適用されたことについては紙屋正和氏「前漢諸侯王国の財政と武帝の財

政増収策」(『福岡大学研究所報』三七)を参照されたい。

この桑弘羊の司法論は恐らく張湯をはじめとするいわゆる酷吏たちの議論を踏えたものであらう。従つて彼が政策実施当初からこのような形で構想していたかどうか、疑問が残る。なお、王鳴盛は『十七史商榷』卷二、「張湯孔僅桑弘羊」において桑弘羊らの財政策は張湯らの酷吏の法的措置を背景にして始めて効果的に運営され得たとしている。

(三) 救災

今日では社会政策の政治に占める比重は大きい。社会政策に意を用いない政府はないといつても過言ではない。とくに救貧は重要な社会政策と看做されている。この点に關して桑弘羊はどのような見解をもっていたであらうか。桑弘羊の場合、注意すべきは救貧と救災とがはっきり區別されていることである。先ず救貧についての彼の主張を見よう。

縣官の百姓に於けるや慈父の子に於けるがごとし。忠なれば誨うるなからんや。之を愛すれば勞つとむるなからんや。故に春は親ら耕して以て農を勧め、賑貸して以て不足を賙い、澮水を通じ、輕繫を出し、民をして時に務めしむるなり。(しかるに)恩を蒙り澤を被りて今に至るも猶お以て貧困なるはそれ與に道を適ゆき難きことは是の若し。

(授時第三五)

と。君主(政府)は慈父の心を以て人民の生活を思い、春は藉田によつて農事の範を示し、貧窮者(不足者)には種穀を貸与し、灌漑水路を整備して農事に精勵するよう指導している。しかしこのような君主の努力にもかかわらず、一向に貧窮はなくなるならない。何故か。それは災害や疾病が原因なのではなく、怠惰と奢侈に由来するのである。

その地を共にし是の世に居り、災害・疾病あるにあらずして猶お以て貧窮なるは、惰にあらざれば則ち奢なり。奇業・勞入なくして而も猶お以て富裕なるは、儉にあらざれば則ち力つとむるなり。

(授時第三五)

事に居て力めず財を用いて節せざれば、財あること水火の如しと雖も、窮乏、立ちどころにして待つべし。民、

畜えざれば、有司、之が耕織を助くと雖も其れ能く之を足らさんや。

(同上)

と。そのような怠惰や奢侈を事とする者に対しては君主や政府がいくら援助しても彼らの生活を充足させることはできないであろう。要するに不真面目で生活設計もしないようなものには救済の意味がない、と考えるのである。

以上のような論拠から桑弘羊は救貧対策には消極的であった。しかし一方、災害(や疾病)が原因で生活が困難に陥った者に対しては積極的に救済の手を差し延べようとした。

水・旱は天の爲す所にして饑・饉は陰陽の運なり。人の力の故にあらず。太歳の数、陽にあれば旱となり、陰にあれば水となる。六歳にして一饑、十二歳にして一荒なり。天道然り。殆んど獨り有司の罪にあらざるなり。

(水旱第三六)

と。広大な中国では毎年何処かで災害が起るといわれるが、大規模な災害(洪水・旱魃)は桑弘羊も認めるように一定の時間毎に周期的に発生する。彼は、天人相関説には批判的な立場から、水害や旱魃も、また豊作や凶荒も天然現象であつて自然の法則に従つて起るものであり、従つてそれは人の行為とは関わりのないもの、為政者の政治姿勢とも無関係なもの、とするのである。

このように政治と災害の因果関係は否定しつつも、しかし彼は当局者としてその対策を常に心掛けておくべき姿勢はもつていた。人民の中には勤勉で計画的な生計を営む努力をしても、不運、災害に遭つたり、何らかの不可抗的な悪条件に災いされて、生活が困難に陥るものがある。そのような場合には君主、或いは政府は慈父の立場から彼らを救済する義務がある。

(大夫曰く) 文學の言に「天下平らかならず庶國寧んぜざるは明王の憂いなり」とあり。故に王者の天下に於けるや猶お一室の中のごとし。一人のその所を得ざるものあれば則ち之がために樂しまず。故に民流溺して救わざるは恵君にあらざるなり。：饑・寒者に衣・食するは慈父の道なり。

(憂邊第一二)

と。君主、政府は支配下の全ての人民に心を配り、溺れる者は救い、饑者には食糧を与え、凍者には衣服を用意して、生活が維持できるよう配慮するのだから、というのである。

要するに桑弘羊は困窮者の生活態度に目を向け、困窮者をいわゆる貧窮者と災害（疾病）による困窮者とに区別した上、後者の救済を主張したのである。

この救済論も儒教的な家父長的政治理念に基づきつつ、主として自然の災害から良民を保護しその生活の維持・安定をはかるものであり、国防論と共通の目的意識から論ぜられているのである⁽¹⁹⁾。

註(17) 『論語』第二四、憲問篇の文。

(18) 『韓非子』卷一九、顯学篇の文。

(19) この救済論に対しても賢良が批判を加えている。要約すると次の如くである。一体、農民の貧困は決して奢侈や怠惰が原因なのではなく、劣悪な農地と重い課税という悪条件に由来する。故にそのような悪条件を取り除いてやらなければ、民は豊かにならないし、禮教も普及しないであろう⁽²⁰⁾と。

『漢書』食貨志（上）の暈錯の上言に見える農民たちは平常の年においてさえ、極めて厳しい条件の下に生活することを強いられている。田租、算賦、力役、更には臨時の不合理な賦課が加えられ、貧窮にあえぐのが寧ろ当然の姿であるように見うけられる。如何に努め、いくら節約しても貧窮から脱け出せないのが実情であるとすれば、貧困が怠惰か奢侈に由来するというのは農民の実際を知らない一方的な議論であるともいえる。

桑弘羊は、商人の生活習慣および自ら節儉と営為によって富を成した経験から、生活の合理化と営為が富をもたらすという信仰をもつに至つたらしい。しかしこの信仰に基づく貧窮批判は、当時の遊惰な人々の生活に対する批判としては有効であり得ても、それを一般化することには問題があり、況んや救済策排除の根拠としたことは短慮に失したものと評すべきであろう。

(20) 周公之相成王也、百姓饒樂、國無窮人、非代之耕織也。易其田疇、薄其稅斂、則民富矣。上以奉君親、下無飢寒之憂、則教可成也。語曰、「既富矣、又何加焉。曰教之。」教之以德、齊之以禮、則民徙義而從善、莫不入孝出悌。夫何奢侈・

(四) 經濟の調整

適切か否かはともかくとして、参考までに一つの指標を近世西欧の經濟政策にとつてみるなら、政府が独自の立場から經濟に対して関与することは經濟自由主義のアドラム・スミスには歓迎されなかったが、しかし當時の西欧の国々、フランス（コルベルティスム）やドイツ（カメラリスムス）では、否、一時はイギリスにおいてさえも、政府が經濟を指導したことは周く知られている。

漢政府の立場を代辯する桑弘羊においても經濟に対する調整が君主、或いは政府の任務の一つに数えられている。

古の國家を立つる者、本末の途を開き、有無の用を通じ、市朝もて以て其の求めを一にし、士民を致し萬貨を聚め、農商工師をして各々其の欲する所を得、交易して退かしむ。『易』に曰く、其の變を通じ民をして倦まざらしむ、と。：故に工出でざれば則ち農用乏しく、商出でざれば則ち實貨絶ゆ。農用乏しければ則ち穀殖えず。實貨絶ゆれば則ち財用乏し。

(本議第二)

と。君主、政府は人民に農業（第一次産業）や商工業（第二次産業）によつて生計を立てる道を用意し、流通機構を整備して有用・無用の財を交換させ、流通經濟を促進することによつて人民の生産意欲を高め、再生産を拡大させるよう指導しなければならぬ。農・工・商業者がそれぞれ生産活動に励めば結局は國家の財政も豊かにすることができ、というのである。

桑弘羊によれば、広大な中国には全体として人民の需要を充たすに足る豊かな資源・産物があるにもかかわらず、一部に欠乏する地方があるのは流通機構が不備だからである。

今、呉越の竹、隋唐の材、用うるに勝るべからず。而るに曹・衛・梁・宋、棺を采り戸を轉ず。江湖の魚、萊黃

の鮓、食うに勝うべからず。而るに鄒・魯・周・韓、藜藿もて蔬食す。天地の利、瞻らざるなく、山海の貨も富まざるなし。然るに百姓匱乏し財用足らざるは多寡調のわず、天下の財散ぜざればなり。(通有第三)

と。流通を盛んにするためには文学・賢良などの説く農業立国ではなく、農業の外に商工業などのいわゆる第二次産業の並存が不可欠であり、商工業が並存してこそ農業も存立しうるのである。商工業が存在しなければ、農業そのものの発展もあり得ない、とする。彼は『管子』を引き、それを布衍しつつ諸種の産業の相互関係を論じていう。

『管子』に曰く、宮室を飾らざれば則ち材木用うるに勝うべからず。庖厨に充てざれば則ち禽獸も其の壽を損なわず。末利なければ則ち本業、何より出でん。黼黻なければ則ち女工施こさず、^⑧と。故に工商梓匠は邦國の用、器械の備にして古よりこれあり、獨りこゝにおいてするにあらず。…百工、肆に居り以て其の事を致し、農商交易し以て本末を利す。山居澤虞、蓬蒿塊角にも財物流通し以て之を均しくするあり。是を以て多き者獨り衍^やかならず、少き者も獨り饑えず。若し各々其の處に居て其の食を食わば則ち橘・柚も鬻がれず、陶鹵の鹽も出でず。旃罽市れずして吳唐の材も用いられざるなり。(通有第三)

と。要するに各種の生産業が並存し、相互に異なる生産に従事してその生産物(サービス)を交換し、財貨の偏在をなくしてこそ人々の生活を豊かにすることができるのである。

然らば各種の生産業が並存し、相互に財貨を交換できる体制さえ整えば、經濟の自律性に信頼してよいのか。經濟社会は自律的に財貨の調整をはかることができるのか。桑弘羊は上のような經濟社会を想定しながらも、各種の産業の生産活動の結果を樂觀的に眺めることができなかった。アダム・スミスのように「見えざる神の手」の存在を信ずることができなかったのである。流通機構も人民の自由な運営に任せておくならば必ずや特定の有力な業者の独占するところとなり、財貨は特定の場所に蔵匿され、暴利追求の道具と化してしまふに違いない。

智者に百人の功ありて愚者に本を更^{つぐな}わざるの事あり。人君調^{とと}のえざれば民に相妨ぐるの富あり。此れ其の百年の

餘を儲えるものあり、糟糠をも厭わざるものある所以なり。聚あつまるを散じ利を均しくする者あるにあらざれば（財物）齊しからず。故に人君、其の食を積み其の用を守り、其の有餘を制し其の不足を調のえ、溢羨を禁じ利塗を厄し、然る後百姓をして家毎に給り人毎に足らしむべし。^(例)

（錯幣第四）

と。さればこそ君主、政府による流通機構の管理が必要になる。人民の生活を均等に充実させるためには人民の共通の必需品を国家が集散し、有餘と不足とを調整しなければならない、というのである。ここには天下の人民の生活を均等に保たねばならないという家父長的な使命感が働いているのである。そしてこのような観点から（現実には政府の要請に非協力的な大商人を懲罰するという意図も含まれていたのであるが）策定されたのが塩鉄専売と均輸・平準、中でも均輸・平準であった。

塩鉄専売とは、これまで民間企業であった製塩・製鉄業を、生産部門は旧来の民営形態を残しつつ、流通・販売部門を政府が掌握するという形で官有化し、製品を均一化し専売価格で販売するものである^(例)。

均輸・平準に関しては、先ず均輸は各地の方物（特産物）を豊富で低廉な時期（收穫期）に無償で供出させ、郡縣に配置された均輸官を通じて当該物資の不足し高価な地方へ直送して販売し、価格を平均化するもの、いわば空間的な価格の断層を均輸官の市場操作で填めようとする制度であり、これに対して平準は均輸と密接な関連のもとに行われるものであるが、首都に大司農の属官平準令の管理する倉庫を設けて、收穫期に特定の餘剰の物資を購入貯蔵し、当該物資の減少し騰貴するのを待って之を放出し価格を調節するもの、いわば時間的な価格の断層をやはり政府の操作で解消する制度である^(例)。塩鉄専売（や酒専売）、均輸・平準の利益はいずれも政府に吸収され、財政補填に充てられたことはいうまでもない。

なお、均輸（・平準）制度の運用に当っては距離と運送費との関係などに極めて精密な計算が導入されていたらしいことが『九章算術』（卷六）均輸 によって窺われる^(例)。

註(20) 現行本『管子』にはこれに符合する記述は見当たらないが、郭沫若『塩鉄論読本』は『管子』侈靡篇の大意を述べたものとする。

(21) 楊樹達『塩鉄論要釈』はこれを『管子』国蓄篇の文とする。

(22) 塩鉄専売の経営形態については、塩・鉄ともに生産部門は民営、販売流通部門は官営とする藤井宏氏の説と、鉄のみは生産・流通部門ともに官営とする影山剛氏の説がある。最近では伊藤徳男氏「漢代の塩鉄専売制について」(『東北大学教養部紀要』二五号)が前者を支持する外、多田狷介氏「前漢武帝時代の酷吏張湯について」(『東洋史研究』三六—二)も前者を支持している。

(23) 影山剛氏「均輸・平準と塩鉄専売」(岩波講座『世界歴史』4)。なお、均輸に関しては山田勝芳氏(『漢代財政制度変革の経済的要因について』『集刊東洋学』三一号、注(初))に異論があり、地方で徴収された賦銭を資本として(地方の)商品価値の高い物品を買い上げ上輸することである、とされる。極めて合理的な解釈であると思われるが、筆者にはまだなじめないで紹介するにとどめる。

(24) 影山剛氏「中国古代における都市と商工業」(『歴史学研究』四七一号)。

(25) 経済調整論に関する賢良の批判は、政府が商工業を抑圧し利益追求の道を塞いでさえ人民は非をなすのに、政府自ら進んで官利事業を興し、人民の利益追求を煽るのが抑もの誤りの本である、ということに盡きる。

いわゆる経済調整策の狙いが利益の追求であつたことからして、その後の政策に関して不合理な強制が附加され、当初の政策の内容が変更されたりする。塩鉄会議における政策批判は主としてこの点への攻撃であるともいえる。

均輸に関しては、本来の特産物或いは余剰の産物を缺乏する地方へ直送するという趣旨は後退して、特産、余剰とは拘りなく、政府の必要とする物資を強制的に徴収するよう改められ、農民は二重の賦課に苦しむ事実が指摘される※(四)。

平準に関しては、收穫時に担当官吏が指定の物資を買い集めると、当該物資は騰貴し、商人の中にはこの制度を利用して官吏と結託し、利益を挙げるものがある一方、大商人は政府の買い上げを見越して買い占めをし、暴利を貪る有様で、年間を通じて価格を低廉に安定させるといふ平準の趣旨は全然実現されていないと批判する※(五)。

塩鉄専売制については、とくに鉄専売に関して批判が加えられる。同一形式の農具を作り全国一律に割り当てて個々の地方の農業の慣習を無視していること※(六)、農民に製品の選択を許さず、しかも価格が高く均一であること、製品の購入に際してサービスが悪く、入手に手間がかかること※(七)、また製品が売れないと、農民たちに強制的に割りつけたり、農具の生

産に徭役労働や徒刑囚の不熟練労働を充てるところから、費用のかかる割に製品が良質でないこと、加えて（農具）生産がノルマに達しないと、農民たちが応援に駆り出されること、などの不合理が指摘される。

要するに経済調整策は、理念としてはもともと人民の生活を均等に安定させることを主眼に論じられ具体化されたのであったが、しかし現実の政策推進の過程で財政補填の要請という至上命令から政府の利益追求の姿勢が強化され、家父長的な政策理念は後退し、一部の経済調整策が人民の搾取の手段と化してしまっているのである。

(イ) 古者之賦税於民也、因其所工、不求所拙。農人納其穫、女工効其功。今釋其所有、責其所無。百姓賤賣貨物以便上求。問者郡國或令民作布絮、吏恣留難、與之爲市。吏之所入、非獨齊阿之繅、蜀漢之布也、亦民間之所爲耳。行姦賣平、農民重苦、女工再税、未見輸之均也。

（本議第一）

(ロ) 縣官猥發、關門擅市、則萬物並收。萬物並收、則物騰躍。騰躍、則商賈倖利。自市則吏容姦豪、而富商積貨儲物以待其急、輕賣姦吏收賤以取貴、未見準之平也。

（本議第一）

(ハ) 夫秦楚燕齊、士力不同、剛柔異勢。巨小之用、居局之宜、黨殊俗易、各省所便。縣官籠而一之、則鐵器失其宜、農民失其便。器用不便、則農夫罷於轡、而草萊不辟。

（禁耕第五）

(ニ) 縣官鼓鑄鐵器、大抵多爲大器、務應員程、不給民用。民用鈍弊、割草不痛。是以農夫作劇、得獲者少、百姓苦之矣。

…今縣官作鐵器、多苦惡、用費不省、卒徒煩而力作不盡。

…今總其原得壹其賈、器多堅礪、善惡無所擇。吏數不在、器難得。…棄膏腴之田、遠市田器、則後良時。鹽鐵賈貴、百姓不便。…鐵官賣器不售、或頗賦與民。卒徒作不中程、時命助之。發徵無限、更繇以均劇、故百姓疾苦之。

（水旱第三六）

(五) 交易

さて、桑弘羊が国内の物資の流通を強調したことは上に見た通りであるが、では彼は国外の諸国や諸民族との物資の交流についてはどのような考えをもっていたのであろうか。近世西欧の諸国家では国の財政を豊かにする方途として、とくに国際貿易が重視されたが、桑弘羊の場合はどうであったか。勿論、前二・一世紀の桑弘羊に国際貿易論などという積極的なものを期待することはできないが、僅かにそれに触れたものとして次のような陳述がある。

今、山澤の財、均輸の藏は輕重を御し諸侯を役する所以なり。汝漢の金、纖微の貢は外國を誘ない胡羌の寶を釣る所以なり。夫れ中國一端的の縷は匈奴累金の物を得、敵國の用を損ず。是を以て羸驢駝駝、銜尾塞に入り、驛驂駟馬、盡く我が畜となる。鼯鼯狐貉、采旃文罽、内府に充ち、璧玉・珊瑚・瑠璃、咸な國の寶となる。是れ則ち外國の物、内流し、利、外泄せざるなり。異物内流すれば則ち國用饒かにして、利、外泄せざれば則ち民用足る。

(力耕第二)

と。山沢の財、均輸の藏が經濟、或いは政治に對する統制力の源泉である、とする点については贅言を要すまい。ここで注意すべきは汝漢地方産出の黄金や貢納された精巧な絹織物が外国(人)を誘致したり、胡羌の宝物を吸収する手段と見做されていることである。北方や西方産の種々の馬類、色々な種類の毛皮、彩旃や文罽も絹織物と見返りに輸入され、南方産の璧玉、珊瑚、瑠璃などの異物も黄金や絹織物と引き換えに中国に流入する。このように黄金や絹織物の見返りに中国で産出しない財貨が輸入され、内府に納められたり民間に流通することが中国全体の富を増加させ、人民の生活を豊かにする一方、匈奴や敵國の經濟力・軍事力を奪う結果にもなる、というのである。

桑弘羊においては、このようにいわゆる珍怪異物は市場において常に巨大な評価を受け、巨額の貨幣に交換され得る、従つて巨大な富を象徴するものという觀念があつたのであろうか。彼は種々の財貨の流入が国庫を充実し、經濟・社会を豊かにする、と考えはしたが、その見返りに中国の貴重な財貨、とくに黄金が流出することにはさしたる憂慮もしなかつたらしい。しかし黄金が流出することによつて中国全体の貨幣総額が減少し、財貨の評価自体が変動して經濟全体に芳しからぬ影響を与えることは見易い。珍怪異物の流入が當時の奢侈の流行を煽り、經濟に刺戟を与えたにしても、その影響は一般人民の生活にどの程度まで及び得たであらうか。むしろ黄金が絹とともに国外に流出したことの消極的意義の方がはるかに大きかつたように思われる。この点に關する文學の批判は的確である。

夫れ上、珍怪を好めば則ち淫服下流し、遠方の物を貴べば而(則)ち貨財外充す。是を以て王者は無用を珍とせ

ずして其の民を節し、奇貨を愛せずして以て其の國を富ますなり。

(力耕第二)

と。君主が珍怪を愛好すると、民間でもそれを承けて珍怪の愛好、奢侈が流行し、遠国の財貨を喜び輸入することによって中国の財貨（黄金・絹）が流出する。奢侈の流行を、そして財貨の流出をなくすには君主自らが節儉の範を垂れなければならぬ、というのである。財貨の流出に関する危機意識は文学の方が遙かに深かったといえよう。文学の批判に対する反論で桑弘羊がこの点に全然言及しなかったのは、或いは彼には黄金は、年々再生産される絹と同様、中国には無尽蔵であり、顧慮するに値しない、と考えたからだろうか。

周知のように絹や黄金は武帝の對外発展の結果、海外への流出を顯著にするが⁸⁰、銅錢とともに当時の貨幣（上幣）であつた黄金の流出に対する適切な措置を、当時の政府当局者、桑弘羊らの講じなかったことが自後の国外流出を促進する結果となっている。その意味からすれば、この点に関する定見をもたなかったことはやはり彼の政治經濟論のいわゆる限界を示すものといえよう。

註⁸⁰ 勞榘氏「漢代黄金及銅錢の使用問題」〔中央研究院歷史語言研究所集刊〕四二—二三。拙稿「ブトレマイオスにおける黄金半島とカッチガラについて」〔『古代文化』二七一—二二〕。

（六） 財政

以上の諸節において桑弘羊の抱懷せる君主或いは國家の任務に関する見解を見てきたのであるが、最後に君主或いは國家が上の諸任務を遂行する上での必須の基礎的条件について、或いはそのあるべき財政の姿について、彼がどのような見解をもっていたかを考察することにしよう。

先の国防論で見たように、桑弘羊は積極的で強硬な對外政策を主張したが、そのことから推測されるように、彼は

權力の抛り所を力、すなわち軍事力に求める。この点につき彼は秦帝国を例にとりつつ、

秦、既に天下を并せ、東は沛（涇）水を絶り、朝鮮を并せ滅ぼし、南は陸梁を取り、北は胡狄を卻け、西は氐羌を略し、帝號を立て四夷を朝せしむ。舟車の通ずる所、足迹の及ぶ所、畢く至らざるなきは其の德に服するにあらずして其の威を畏るればなり。力多ければ則ち人朝し、力寡ければ則ち人に朝す。

（誅秦第四四）

と。秦が天下を并せ四夷を服属させ得たのは力によってである。大きな力をもつものが天下を支配し、外民族をも朝貢させ得るのである。君主の徳を推し広め、その意志を成就するには武力の裏付けがなければならない、とする。

然らば武力さえ備えていれば君主や国家は安泰なのか。無論、彼は十分とは考えない。武力の抛り所でもある經濟力、經濟的基盤をも同時に要求するものである。彼はこの点について、春秋・戦国諸侯に例をとり、次のように論ずる。

今、かの越の具區、楚の雲夢、宋の鉅野、齊の孟諸は國を有つ者の富にして霸王の資なり。人君、統べて之を守れば則ち強く、禁ぜざれば則ち亡ぶ。齊はその腸胃を以て人に予えたれば家（臣）強くして制せず、枝大にして幹を折る。巨海の富を専らにし、魚鹽の利を擅にするを以て勢は以て衆を使うに足り、恩は以て下を卹うに足ればなり。

（刺權第九）

と。それぞれ諸侯の有する山沢が君主權の經濟的基盤であるとともに、各国の國際政治での活躍の源泉であり、それらの山沢を家臣に与えた時には君主權力の凋落する様子が指摘される。いわゆる山林・薮沢・陂海からの収益を独占し、これらを財源とすることによって下に恩を施し、下を使役することが君主權の強化、國家の強盛をもたらす、というのである。

ところで君主、或いは國家權力の經濟的基盤は山林・薮沢・陂海からの収入のみでなく、事業収益にも求めうる。

昔、商君の秦に相たるや、内には法度を立て刑罰を嚴にし政教を飭のえたれば、姦偽も容るるところなし。外は百倍の利を設け山澤の税を收めたれば、國富民強く器械完飾して蓄積餘り有り。是を以て敵を征し國を伐ち、地を攘じ境を斥き、百姓に賦せずして師以て贍る。

(非軼第七)

昔、商君、開塞の術に明らかにして當世の權を假り、秦のために利を致し業を成せり。是を以て戰勝し攻取し、近きを并せ遠きを滅ぼし、燕・趙に乘じ齊・楚を陵げば、諸侯、斂衽し西面して風に向う。…それ蓄積・籌策は國家の強たる所以なり。

(同上)

と。これら二つの文章から山沢の收入と並んで営利事業からの収益が財政收入の一つの柱とされていることが窺われる。百倍の利や籌策が具体的にはどのような事業を指すのか不明だが、山沢の利とは別種の事業であることは明らかであり、それらからの收入が國家強盛の基礎になっている、とするのである。この営利事業は彼の財政策との関連でいえば恐らく均輸・平準に該当するものであろう。

要するに桑弘羊は君主の、或いは國家の權力の抛り所を武力に求め、そのより基礎的な權力の基盤として山沢などの家産收入、営利事業収益を考えていたのである。なお、この外にもこれらと性質の異なる田租や算賦（人頭税）、公田の收入、市井の税などの諸收入も君主の、或いは國家の基本的な經濟基盤として把握していたことはいうまでもない。

ところでこの家産收入、事業収益は彼の政治經濟論、とくに財政論の中でどのように位置づけられていたのだろうか。この点に関して手掛りを与えてくれるのは次の一文である。

…古者、名山大澤の以て封ぜざるは下の利を専らにせんがためなり。山海の利、廣澤の畜は天地の藏なれば宜しく少府に屬すべきも、陛下は私せずして以て大司農に屬せしめ以て百姓を佐助せり。

(復古第六)

と。この趣旨は次のように言い換えることができる。現実には山沢の利は天子（皇帝）の家産として少府に屬すよ

う制度的に定められているが、しかし下の利のために開放すべしという古来の理想からすれば、少府から大司農に移して人民のために用うべきである。陛下はそうお考えになり、山沢の収入を少府から大司農へ移管されたのである。と。下、すなわち人民のものは人民へ、公のものは公に帰すという考えがここには見られる。このような発想は、塩鉄収入の私財政から公財政への移管の措置のみならず、均輸・平準の設立過程において、私財政に属した貢献を廃止し、それに該当する収入を均輸・平準の収益の中に吸収して公財政に移管したことにも見られる。経済の調整という国家の事業の一環である以上、塩鉄専売収入、均輸・平準収益はその制度的理念からいっても公財政に組み入れらるべきものであったろう。また軍事費、犒賞費なども、国防上の必要経費である以上、君主個人の事業費ではなく、国家的・公的な事業費であり、公財政の枠内で賄うべきものと考えられたのであろう⁽⁹⁾。

このように桑弘羊は武帝との親密な関係から諸政策を立案・推進し、その専制政治を助けたが、現実には皇帝の私財政、帝室財政の規模を縮小し、公・私財政規模の均衡を達成する方向で財政改革を推進した。皇帝の家産も天下万民のために活用し安定した財政を組むことが終局的には皇帝の治世を盛んにする、と考えたのであろうか。彼は公財政たる国家財政の収支の均衡を睨みつつ、皇帝の家産を利用開発し、公的性格をもつ項目を公財政に移すことによって公財政の規模を拡大したのである。ここにおいて軍事費なども国家財政の枠内で賄える体制が整えられた。そして国家財政（大司農所轄）の規模を拡大したことは、これまで少府（帝室財政担当）に対して何れかといえば従属的立場にあった大司農の地位を高め、その権力をも強化することになったのである⁽¹⁰⁾。

註(9) 日原利国氏『「塩鉄論」の思想的研究』（『東洋の文化と社会』四輯）。

(10) 『塩鉄論』園池第一三には、

……太僕、水衡、少府、大農、歲課諸人、田牧之利、池鹽之假、及北邊置任田官、以贍諸用、而猶未足。といっているから、彼はこれら経常的な財政収入をも考慮に入れていたことは疑いない。

(29) この一文を桑弘羊の主張と見ることにについては拙稿「桑弘羊の財政策」(前掲)註(3)を参照されたい。

(30) 御史曰、……大夫君(桑弘羊)爲治粟都尉、管領大農事、灸刺稽滯、開利百脈。是以萬物流通、而縣官富實。當此之時、四方征暴亂、甲車之費、克獲之實、以億萬計、皆贍於大司農。此皆扁鵲之力、而鹽鐵之福也。(輕重第一四)

(31) 山田勝芳氏「漢代財政變革の經濟的要因について」(前掲)、紙屋正和氏「前漢諸侯王國の財政と武帝の財政增收策」(前掲)。なお、紙屋氏は財政增收策を図った張本人を張湯とし、財政構造の変更によって國家財政の比重は帝室財政よりも大きくなった、としておられる。

三 餘 論

以上、六節に亙る考察によつて桑弘羊のいわゆる政治經濟論を概観してきた。ここでこの政治經濟論の性格を整理するとともに、桑弘羊の人物像、或いはその評價にかかわる問題として彼の最期に関する二つの見解を紹介し、その再評價の一助としたい。

さて塩鉄會議における桑弘羊の政府当局者としての基本的な議論をまとめてみると、国防、司法、救災、經濟の調整の四項目を主とし、それに交易、財政の二項目を加えた六項目に整理され得るであろう。

国防、救災論は塩鉄專売立案の直接の原因、すなわち匈奴遠征と山東の水災をふまえた議論であるが、ここでは儒教的家父長的な、慈父の立場から人民の均等な生活とその安定を保障すべきことが主張される。

司法論は、新財政実施の結果、発生すると推測される違反の予防、或いは発生した違反の摘発・処置に関する倫理的法制的根拠の展開であるが、法制の施行に教育的効果を期待するところが特徴的である。

經濟の調整に関する議論は、正に塩鉄專売制、均輸・平準制そのものの理論的根拠を説くものであるが、人民への

財貨の均等な分配が念頭に置かれている。

これらの議論に見られる儒教的国家理念や理想は彼が当時の知識人と同様、儒教經典を教養として学び、それを自己の世界観の基調としていたことを示している。

しかしながらその一方で、既に見たように、徳による懷柔を唱える儒家とは明らかに異質の、軍事力を背景にした拡大主義的積極策が国防論において主張され、また救災論における貧窮批判にも『韓非子』（顯学篇）の主張が踏えられ、経済調整論は『管子』に準拠しつつ展開されているのである。

このように見てくると、桑弘羊の政治経済論は儒家的国家理念を基調としつつ、『管子』をはじめとする法家的政策論を肉付けすることによって組成されているといえよう。なおこの外に過去の個人的な理財の経験とそれに基づく生活信条がこれら政策論の基底にあり、彼の主張を個性的なものにすると同時に現実性をも与えていることを看過してはならないであろう。

ところで、上に見てきたように、桑弘羊は儒教を、或いはその開祖孔子を極めて無遠慮な論法で批判しており、そこから彼に対して厳しい批判が加えられる。しかし一方、財政家としての手腕が買われて極めて高い評価をも受けている⁸⁸。このような両極端の評価を受ける根拠は彼自身に備わっているのであるから、彼はこの両面の批評を甘受しなければならぬであろう。ただ、塩鉄会議における彼の儒教や孔子に対する批判については論敵の賢良や文学が儒教思想で武装していたことを無視しては妥当な評価に至り得ないと思われる。桑弘羊は政府当局者の代表として論敵たちの政府・政策批判の思想的背景にまで反駁論及せざるを得ず、その立場を徹底させれば必然的に孔子批判にまで進まざるを得なかった。桑弘羊自身、儒教に対する字種をかなり積んでいたことは五経経文への言及や孔子・孟子の言行に対する的確で批判的な指摘によって窺い得る。また国防論、救災論、経済調整論が儒家的家父長的国家理念を

基礎として展開されたり、司法論で法令の教育的効果を重視するところに儒家思想の強い影響を見ることができ。従って彼自身は儒教に対して深い造詣をもっていたといつて差支えない。にもかかわらず、儒教や孔子に対して手厳しい批判を加えられるのは彼が儒教に対して一定の距離を保っていたことを意味するのではあるまいか。

かかる深い理解はもっていないが、一定の距離をおいて思想を見るという彼の態度は、独り儒教に対してだけでなく、他の思想についてもいえることである。彼の議論には様々な思想家が登場するが、とくに彼が財政政策の典拠とした『管子』についても同じことがいえる。この『管子』に対しても彼が全面的に景仰していたかどうか疑問が残るからである。最近の研究で『管子』の思想の一部に武帝の政策を反映したものの存在すること、つまり偽作されたものの存在することが指摘されているが、これは裏返せば桑弘羊一派の学者により偽作されたとも言い換えることができる⁸⁰。仮にそうだとすれば、桑弘羊は『管子』を政策の典拠として文字通り利用していたともいえる。このような態度には景仰というより不遜とさえ評せざるを得ない一面があり、そこには儒教・孔子批判とも一脈相通するものが見出される。彼は極めて覚めた目で利用できるものとそうでないもの、合理的なものと然らざるものとはっきり区別し取捨しているのであり、どのような思想も思想家も彼には自己の世界観を構成する上での参考・利用の対象でしかなかったことが知られよう。

要するに桑弘羊は儒家、法家の別なく、多様な思想を自己の世界観構成のために利用しているのであり、程度の差はあれ全ての思想に距離をおいて接していたのである。そしてこのように距離をおいたことが多様な思想を彼独自の立場から取捨してユニークな政治経済論を構成せしめるに至った⁸¹、ともいえる。

さて、桑弘羊の評価とも深く関係するのは彼の最期についての解釈である。彼の最期に至る経過については、史料から二通りの解釈が可能であるが、そのいずれを採るかによって桑弘羊は正反対の評価を受けることになる。伝統的

な歴史像は『漢書』霍光伝に基づき、霍光を善玉、桑弘羊を悪玉の黒幕という設定で、大略次のように陳述される。塩鉄會議の後、桑弘羊は自己の子弟のために官を求めて阻まれ、霍光に怨恨を懷き、やはりかつて孫娘の皇后冊立を支援した、蓋長公主の愛人丁外人のために封侯・官位を求めて果さず、霍光を怨んでいた上官桀・安父子と組み、蓋長公主、燕王旦をも一味に加えて霍光排斥を図った。しかしこの事件が昭帝の英断で頓挫すると、彼らは霍光を暗殺の上、昭帝を廃位しようと企て、計画が事前に漏れて上官桀父子は斬られ、桑弘羊は処刑され、蓋長公主、燕王旦も自殺する、というものである。

このような見方に対して必ずしも霍光を善玉とはせず、桑弘羊を悪玉扱いしない扱え方も成り立ち得る。近年、一般化しつつある見方もこの立場である^例。

一体、霍光は『漢書』霍光伝では謹嚴で実直な人物とされるが、しかし実は仲々の謀略家であったことは後の昌邑王（賀）の廃位の経過から推測できる。昌邑王が自らの意に添わない人物であることが明らかになると、即位後僅か一箇月で廃位してしまった経緯には謀略家の面目躍如たるものがある。このような謀略家としての霍光像を以て塩鉄會議前後の諸事象を見直せばどうなるであろうか。

霍光は、桑弘羊、上官桀、金日磾、田千秋らとともに、武帝の臨終の枕許に呼ばれて遺詔を受け、幼い昭帝の後見に当たったが、彼が大司馬大將軍として内朝の実権を握ったのに対して桑弘羊は副丞相御史大夫として丞相田千秋とともに外朝を支配した。この昭帝初期の霍光について、『漢書』車（田）千秋伝は次のように記述する。

武帝崩じ、昭帝初めて即位するも、政を聽くに任えず。政事は壹に大將軍（霍）光に決す。（田）千秋、丞相の位に居て謹厚、重德あり。公卿朝會する毎に、光、千秋に謂いて曰く、「始め君侯みくにと俱に先帝の遺詔を受く。今、光、内を治め、君侯、外を治む。宜しく以て教督することあるべく、光をして天下に負むくことなからしめよ。」と。

と。霍光の田千秋に対する言葉が謙辞であることはいうまでもない。これによれば、既に昭帝初期には霍光は内朝は固より、外朝をも無能の丞相田千秋を操縦することによって支配しようとしていたことが窺える。しかしこの田千秋の下には実力者桑弘羊がおり、三十年に亙る財政権の掌握をよりどころとして外朝を牛耳っていたことは先に触れた通りである。当時、現実の官僚機構や命令系統は外朝を中心に機能しており、霍光は軍事権を掌握するにすぎなかった⁸⁰から、彼には桑弘羊の存在が目障りであつたに違いない。

始元六年二月の塩鉄會議は霍光がこの桑弘羊の權威を剝奪する目的で仕掛けた挑戦であつた。賢良・文学らが桑弘羊等政府当局者に忌憚のない批判を加え得たのもこの霍光の後援があつたからである。一方、桑弘羊も、恰かも武帝の後楯が存在するかのような尊大さで、時には威赫的に賢良・文学に対応した⁸¹。このことは彼が武帝亡き後も自らの政治上の地位を不動のものと錯覚していたことを物語る。しかし現実には昭帝は霍光の手に握られ、彼は皇帝権の援護を得難い立場にあつた。

霍光はこの會議で桑弘羊を叩くと、次に第二弾として大司農に自己の幕僚の楊敞を任命した⁸²。大司農は、天漢三(前九八)年、桑弘羊が免ぜられて以来、武帝の配慮から任命されず、その後は事実上桑弘羊の併任の形をとつていた⁸³。従つて始元六年における大將軍司馬楊敞の大司農任命は桑弘羊から国家財政の管理という最も重要な職務を奪い去ることを意味したのである。霍光との対立が決定的になると、彼は皇帝権の後楯のない自己の地位の不安定さを痛感せざるを得ない。そのような不安にとりつかれた彼に、かねて昭帝の即位に異議を唱え、帝位継承権を主張していた⁸⁴燕王旦の存在は一縷の光明を与えたかもしれない。

この桑弘羊に接近してきたのは内朝で霍光と袂を別つようになつた上官桀・安の父子であつた。上官桀父子は幼少の昭帝の皇后の祖・父という立場を利用して権力を得んとし、当時、宮中に大きな発言力をもつていた武帝の長女蓋長公主および燕王旦と結び霍光を追い落そうとしていたが、霍光との対立が決定的となつた桑弘羊をも味方に加え、

勢力を固めんとしたものである。彼らは燕王の名で昭帝に対して霍光の専横の事実を数え上げ、その罷免を要求した⁽⁴⁾。しかし昭帝の霍光に対する信任は厚く、加えて上書中の矛盾が昭帝によって指摘され、却って上官桀らは昭帝に疎んぜられるようになった。

翌元鳳元年九月、霍光の故吏・諫大夫杜延年、大司農楊敞らは燕王旦、蓋長公主、上官桀父子、桑弘羊らをば霍光の暗殺および昭帝の廃位の陰謀をめぐらしていたとして告発し、入内した上官桀父子を捕斬し、桑弘羊を処刑、蓋長公主、燕王旦を自殺させ、上官桀一族および桑弘羊一族をも処刑した。

この事件は、『漢書』武五子伝、霍光伝の諸伝には上の如く彼らが陰謀を企てたように記述されるが、しかし別の史料によると杜延年・楊敞らによって仕組まれたものであったようにも受取れる。『漢書』杜延年伝⁽⁵⁾には次のような記述が見えるからである。

左將軍上官桀父子、蓋長公主、燕王（旦）とともに逆亂を爲さんことを謀る。假稻田使者燕倉、その謀を知り以て大司農楊敞に告ぐ。敞、惶懼し病と移して以て（杜）延年に語る。延年以聞して（上官）桀ら誅に伏す。……（杜延年）、國家の、武帝の奢侈・師旅の後を承けるを見て、數。ば。大。將。軍。の。た。め。に。言。う。……光、その言を納る。賢良を擧げ、酒權、鹽鐵を罷めんことを議せしむるは皆延年より發するなり。

と。塩鉄會議の開催が霍光の故吏杜延年の提案にかかるものであり、燕王旦の謀反事件の摘發も杜延年によってなされているのを見れば、延年の攻撃目標が外朝の実力者桑弘羊にあったことは明白である。因みに杜延年の父、杜周はかつて（天漢三年）桑弘羊の子弟の罪過を急迫したことで知られ⁽⁶⁾、子の延年も父親譲りの執拗さで桑弘羊をつけ狙っていたことが推測されよう。また陰謀の摘發が楊敞から杜延年への連繫でなされている事実も見逃せない。先述の桑弘羊と楊敞の関係を想起すれば、楊敞と杜延年の連繫の意味するところが理解されよう。杜延年と楊敞は結託して燕王謀反事件をでっち上げ、桑弘羊を謀反グループに嵌め込んで同断に処分してしまったのである。彼らの背後には

霍光がおり、その行動を支援していたことはいうまでもない。

要するに霍光の意向を承けた彼のかつての属僚たちは、霍光の、内朝のみでなく外朝をも支配せんとする野望を實現させ、同時に排斥運動から霍光を護る手だてとして謀反事件を捏造し芝居を打ったのであり、桑弘羊はこの芝居における重要な標的とされ、霍光の同意の下に処分されたのである。

× × × × ×

塩鉄會議が単なる政策論争ではなく、権力闘争の一表現形式であったことは、會議で批判の対象となった諸政策が、一部を除いて廃止されず、霍光政權に継承されていること、およびかつて桑弘羊が提案して實現を見なかった輪台の屯田⁴⁴⁾が霍光によって取り上げられ実施されていることなどからも理解される。このような諸政策の継承の事実から推測すれば、霍光は桑弘羊の政策なり政策理念に異和感をもっていたのではなく、むしろ共鳴するところが多かったのではないだろうか。塩鉄會議はあくまでも権力奪取のための一里塚であり、そこでの賢良・文学を通じてなされた政策批判は表向きの反対であって、霍光自身、全ての新財政策が廃止されることなど望んではいなかったように思われる。このように見てくると、権力闘争を越えて継承された桑弘羊の諸政策や政策理念の現実性・合理性が改めて評価されるのである。

註³²⁾ やや古いところでは李贄『藏書』卷一六、富国名臣總論、近年では安作璋氏「論桑弘羊」(『漢史初探』)など参照。

33) 馬非百(元材)氏は『管子輕重篇新詮』(下)において、『管子』「菴茅謀」の一文をば武帝の泰山封禪の事情を反映したもので王莽時代に記録として定着したとされている。しかし『史記』封禪書には既に「江淮間一茅三脊爲神藉」なる「菴茅謀」の内容の一部が武帝期に現実に施行されたこととして記されており、「菴茅謀」の一文は武帝の封禪儀式の実施時には既に存在していたことがわかる。また、溯って秦始皇の封禪に際しては齊魯の儒生博士らが「席(藉)用須藉」と主張しているところを見ると、この時には神藉に菴茅を用いることはなかったらしい。従って「菴茅謀」の成立は始皇以後、武帝に至る

期間に想定されなければならないが、より可能性の大きい時期は武帝の泰山封禪直前であろう。この時、既に塩鉄専売、均輸・平準制の実施で財政の実権を握りつつあった桑弘羊は、恐らくこれらの政策の典拠であった『管子』の利用を一步進めて、偽作による典拠作りを企て、配下の学者たちに「菁茅謀」などの諸篇を偽作させたものと思われる。

なお、司馬遷は『史記』封禪書において齊の桓公と管仲の議論を載せ、そこで上記江淮の菁茅に触れているが、これは秦始皇の記事によって判断すれば、偽作された『管子』「菁茅謀」に基づいて書き加えたものと推測される。拙稿「桑弘羊の財政策」(前掲)参照。

(34) 高木友之助氏「塩鉄論」にあらわれた桑弘羊の經濟思想について」(前掲)。なお、徐復觀氏は桑弘羊の陳述にあらわれる諸文獻が往往原意とは違つた意味で引用されていることを指摘している(「塩鉄論中の政治社会文化問題」)(前掲)。

(35) 郭沫若「塩鉄論読本」序、西嶋定生氏「武帝の死—「塩鉄論」の政治史的背景—」(前掲)。

(36) 徐復觀氏「塩鉄論中の政治社会文化問題」(前掲)。

(37) 例えば彼の発言に次のようなものがある。

大夫曰、吾以賢良爲少愈、乃反其幽明、若胡車相隨而鳴。諸生獨不見季夏之蟪蛄乎。音聲入耳、秋風至而聲無。諸生無易由言、不顧其患、患至而後默、晚矣。

(散不足第二九)

(38) 『漢書』卷一九下、百官公卿表下、始元六年条。

(39) 馬元材氏『桑弘羊年譜』太始元年条。

(40) 『漢書』卷六三、武五子伝。

(41) 『漢書』卷六八、霍光伝。なお、『漢書』卷七、昭帝紀、元鳳元年九月の条に関する注で顔師古はこの事件をその前年始元

六年九月に繋げるべきであるとする。

(42) 『漢書』卷五九、杜周伝附伝。

(43) 『史記』卷一二二、酷吏伝。杜周。『漢書』卷五九、杜周伝。

(44) 『漢書』卷九六、西域伝下、渠犂には

昭帝乃用桑弘羊前議、以杆彌太子賴丹爲校尉將軍田輪臺。

と見える。参考までに附け加えるなら『資治通鑑』卷二三、元鳳四年の条には、

霍光用桑弘羊前議以賴丹爲校尉將軍田輪臺。

とある。なお、伊瀬仙太郎氏「漢代の西域経営」(前掲)参照。

——文学部教授——